



厚生労働省

ひと、くらし、みらいのために
Ministry of Health, Labour and Welfare

今後の検討課題について

厚生労働省 政策統括官付参事官付
国際分類情報管理室

Ministry of Health, Labour and Welfare of Japan

第21回統計分科会生活機能分類専門委員会までの経緯

- 2018年6月にWHOより公表されたICD-11にICFの一部の項目が導入されたことを受け、専門的見地を兼ね備えた実務者レベルでの現場に即した具体的対応がこれまで以上に求められるとされ、第19回ICF専門委員会（2019年3月14日開催）において、WGの設置が決定された。
- 2年間のWGの検討内容について、成果報告として取りまとめ、第21回ICF専門委員会（2021年3月5日開催）に報告された。

2018年6月 ICD-11の公表。ICFの一部の項目が導入



2019年3月 第19回ICF専門委員会
現場レベルにおけるICFの一層の普及を目的とした「生活機能分類普及推進検討ワーキンググループ（WG）」の設置を決定



2019年5月 ICD-11をWHOが採択



2021年2月 WGの成果報告書取りまとめ



2021年3月 ICF専門委員会に報告

生活機能分類普及推進検討ワーキンググループ成果報告書

概要：ICD-11においては、生活機能評価に関する補助セクション（第V章）が新設されたが、その活用方法についてのガイドライン等が具体的に示されておらず、活用にあたってはコンセンサスが得られるツール等を作成する必要がある。本ワーキンググループでは、この状況を解決するため、ICD-11第V章を足がかりとして国際分類に紐づいた生活機能評価の臨床現場における普及を進めるべく取り組み、その成果を報告書としてとりまとめた。

成果

- （１）WHO が公表するICF 関係資料の翻訳案作成
 - ICD-11 第V 章の仮訳案
 - ICF 2020 仮訳案の作成
- （２）ICD-11 第V 章の具体的な活用案作成
 - ICD-11 第V 章の全項目の評価ツールの作成
 - 国内でのフィールドテストに必要な教育資料及びツールの作成
 - フィールドテストの実施
 - ICF リコードルールの提案

今後の方向性

本評価ツールが実際に臨床現場で広く使用されるために、生活機能評価に使用しやすい簡易な項目セットの準備や実際の活用の際のルールや利用方法の整理など、より具体的な活用に向けた取り組みを進めるとともに、医療・介護職や情報管理に関わる専門職などの教育プログラムへの導入、学習システムの整備及びそれと同期した具体活用例の体系的な提示などによるICF の普及・啓発活動などが求められる。さらに、統計として役立てるための精緻な仕組みを作るため、学術的な知見の蓄積、標準化した指標の開発やICD-11 の他章との併用による疾病統計への応用方法の検討なども求められる。その上で、前述の通り、ICFは臨床現場にとどまらない、多くの場面での「共通言語」としての活用が期待されていることから、ICD-11 第V 章での臨床現場での活用方法を参考に、ICF そのものについて、WHO における検討内容もふまえ様々な場面に適した活用方法や、統計のための分類ツールとして多方面で活用される手法を検討していく必要がある。

第21回ICF専門委員会の議論の整理

主なご意見

- 教育に関するシステムを作り、臨床現場で活用できるようにすることが必要。
- ICFは、国際比較をするための分類であり、用語の定義やスケールを一定にするため、日本の病院がもつ多くのデータを活用して分析等を行い、疾患と生活機能の分布や関係性を世界に示すことが必要。
- 今後、医療や介護などの既存の評価スケールとの互換性が担保されることが重要。
- 疾病統計への応用について、現在実施されている診断された病名を項目から選ぶ方法ではなく、新たな統計の枠組みでICFを取り込んでいけたらよい。
- ICFは、地域包括ケアが鍵であり、国際比較のためだけではなく、病院、施設、在宅をつなぐ共通言語でもある。評価者が変わっても、普遍的に評価できるものが必要。
- 環境因子を除外した場合を評価した上で、介入による効果が客観的に評価できるようにするべき。

今後の検討課題（案）

方針（案）

令和3年2月に取りまとめられた生活機能分類普及推進検討ワーキンググループの成果を基盤として、国際的な動向を踏まえつつ検討を行い、将来、ICFが多様な現場で広く使用されることを目指す。

そのため、当面、ICD-11第V章の活用に重点を置き、リハビリテーション等の先行している分野からの普及を目指す。

併せて、国内での活用状況や得られた知見を国際的に発信し世界のICFをリードしていく。

今後の検討課題（案）

- 実用的な評価セットの検討
臨床現場で広く使用されるために、評価者に負担がかからず、普遍的に評価できる簡易セットを検討し、実用化を目指す。併せて、既存の評価スケールと互換性を確保できる仕組みを作る。
- 疾病統計への応用方法の検討
統計として役立てるための精緻な仕組みを作るために、ICD-11の他章と組み合わせたコード（例：歩行、ADLなど）を検討する。
- 教育ツールの開発と教育環境の構築
医療（リハビリテーション、看護等）・介護職や情報管理に関わる専門職に向けた教育資料を作成し、臨床現場での普及活動を目指す。
- 国際的な貢献
我が国の先行した取り組みを世界に発信していく。また、海外での活用状況について医療・介護分野のみならず幅広く情報収集を行い、ICFの可能性を探索する。